

県内留学生の就職と卒業後の活躍事例 ③

県内留学生の就職と卒業後の活躍事例のシリーズ3回目。今回は、海外に進出し、旺盛な需要を県内に取り込もうとしている企業で活躍中の卒業生2人を紹介する。

ベトナム子会社との協働強化を促進するチャン ティ ハイ アン氏
— 協和機工株式会社 —

産業用機械メーカーの協和機工株式会社（本社：佐世保市、社長：山口哲生氏、社員140人）は、発電所や製鉄所向けの大型ポンプ部品・バルブのほか、シールド掘進機、ジャッキといった土木建設機械、工場のクレーン・台車などの荷役運搬機械、船体ブロックなどを受注生産している。

また、ベトナム南部ドンナイ省のニョンチャック工業団地には、2012年から本格稼働しているKYOWA VIETNAM工場がある。この工場では、母体の協和機工で十分なトレーニングを積んだ現地社員が、大型工作機械を使い切断から溶接・機械加工・組み立てまでの一貫生産を行っている。

同社は、2006年12月から技能実習生（注1）の受入れを始め、現在はベトナムから20人、下請け会社を合わせると36名が在籍しており、実習生用の寮も完備している。

（注1）「外国人技能実習制度」は発展途上国への技術協力や国際貢献を目的に、日本の労働現場で外国人労働者を実習生として受け入れる制度である。建設や製造業など特定の仕事を学ぶ外国人に「技能実習」の在留資格が与えられ、最長5年まで働くことができる。この制度は1993年に開始され、現在77業種が対象となっている。長崎労働局のまとめによると、2017年10月時点における県内の技能実習生数は2,628人（前年比6.1%増）に上る。

■就職のきっかけは、長崎留学生支援センターの「ソリューション型インターンシップ」

長崎留学生支援センターでは、企業と留学生との接点を増やし、留学生への理解を深めてもらうと「ソリューション型インターンシップ」や「留学生と企業との交流会」を14年度から毎年開催している。このうち、ソリューション型インターンシップは留学生と日本人学生が与えられた地域の課題に関する解決策を一緒に考え、そのアイデアを地元企業・団体からの参加者に向けて発表するもので、留学生と企業との相互理解を深めることを狙いとしている。

チャン ティ ハイ アン氏（1988年生まれ、ベトナム出身）は14年に開催されたインターンシップ参加者の一人である。ハイ アン氏にとってキャリアの転機となったのが、このインターンシップであった（写真1）。ここで、現在の勤務先である協和機工に出会い、同社で短期のアルバイト

トを経験したのち、15年4月から正社員として採用された。ハイ アン氏が誠実かつまじめに課題に取り組んでいたことが採用につながったという。

ハイ アン氏は、もともと日本のアニメが好きで日本の文化に興味を持ち、ベトナムの大学で2年間、日本語や日本文化を学んだ後、活水女子大学現代日本文化学科の3年次に編入した。卒業後は、協和機工に入社、同社管理部総務課に配属となった。



(写真1) ハイ アン氏（前列一番右）ソリューション型インターンシップにて

■語学力を活かした業務

ハイ アン氏が担当している業務は大きく分けて3つ挙げられる。

一つは、KYOWA VIETNAMのスタッフと連絡をとりながら、現地の法制度変更に対応し、入出国関係書類の作成や就業規則、定款の変更などの業務に取り組んでいる。ハイ アン氏は、「専門用語を自分で調べて理解しながら取り組まなければならないため、手間がかかり大変だが自分の成長につながり、やりがいを感じている」という。

二つ目は、ベトナム人研修生、実習生の入国書類の作成や、研修生向けの安全教育や掲示物などの翻訳業務及び技能実習生・研修生のサポートである。実習生らが生活面で不安に思っていることや困っていることなどの相談に乗り、問題の解決に向けて一緒に考え、職場で改善すべきことを会社に提案し、きめ細やかに対応するなど、実習生らが働きやすい職場環境づくりに努めている。

三つ目は、九州の大学に通う留学生の情報収集・採用活動である。大学訪問やネットワークの活用などを通じ交流を深めるとともに、留学生を対象とした会社説明会では、わかりやすく事業内容を説明しPRに努めている（写真2）。「長崎で就職を希望する留学生は多いが、希望する仕事がなく東京や大阪で就職しているケースもみられることから、長崎に就職を希望する留学生が定着できるようにしてほしい」という。

ハイ アン氏は今後について、「キャリアを積んで仕事のスキルを磨き、長期の在留資格を取得して長崎で長く働きたいと考えている。また、近年では長崎とベトナムとの人やモノの交流が急速に活発になってきており、長崎空港からホーチミンへの直行便ができれば、ますます交流が盛んになると思う」と語る。



(写真2) 会社説明会で事業内容を説明するハイ アン氏

海外事業分野で活躍する 程 継中氏 — チョーコー醤油株式会社 —

チョーコー醤油株式会社（本社：長崎市、社長：北野正大氏、社員92人）は、1941年に県下の醸造元29軒が集まり、業界では全国で初めて共同施設で生産・販売を開始した老舗のしょうゆ・みそ卸売会社である。業界初の無添加醤油をはじめ同社の商品は、「チョーコーブランド」として多くの消費者に親しまれている。

同社は、主力の醤油、味噌のほか、つゆ、だし、ドレッシングなどの加工調味料の開発にも力を注ぎ高付加価値を追求し続けており、「かけぼん」や「減塩醤油」シリーズなど、ロングセラー商材を次々と生み出している。例えば、業界初の無添加醤油を前身とした「超特選むらさき」は、大量生産とは異なる高品質の醤油として看板商品になっている。このほか、「ゆず醤油かけぼん」は、醤油のうま味、酢の酸味、砂糖の甘味のバランスが整ったマイルドな甘口ポン酢というコンセプトで、1988年の発売以来、今年で30周年を迎え、年間出荷数が100万本を超える同社の売れ筋商品となっている。

■同社の海外展開

調味料の国内市場は、単身・共働き世帯の増加による個食・即食化、健康志向やこだわり消費など、消費者の食生活が変化しているほか、高齢化による国民の食細りや洋食化の進行などにより消費者の嗜好も多様化していると言われている。同社はこうした環境のなか、国内の消費者の嗜好の変化を捉えた商品を生み出し商機を見出すとともに、2006年に中国（上海・北京）、10年には韓国ソウルへと輸出を手掛けはじめるとともに積極的に海外展開を図っている。現在は中国に、長崎魚市経由で鮮魚に関係する調味料の輸出を行っている。

■海外市場を開拓する程継中氏

こうした海外展開を担う人材として採用されたのが程継中氏（1978年生まれ、中国瀋陽出身）である。1999年に来日、福岡の日本語学校を経て、2005年長崎大学経済学部を卒業、07年に同大学院修士号を取得し、同年、チョーコー醤油へ入社した。大学院時代には、論文作成にあたり県内企業多数をヒアリングのため訪問したという。

程氏は入社後、製造工場、営業、広告・宣伝などの部署を経験し、今年からは海外事業課の課長を務めている。同社東京、大阪、名古屋、福岡支店が受け持つ輸出案件では、中国、韓国、香港、シンガポールなど、現地商社との商談のため海外出張することも多い。国内の人口減少に伴って調味料の需要も減少傾向にあるなか、需要旺盛な海外に販路を拡げ会社に貢献したいとのことであり、同社の海外戦略のキーマンとして活躍している。

また程氏は、キャリアも長く、地元長崎への思いも強い。「調味料だけにとどまらず、長崎の『食』についてみると、県内には旬の魚や野菜などのほか和牛、地酒など地元でしか味わうことができない食材が豊富にある。それらを外国人観光客向けに食事を提供する場所などを設置することで、長崎で消費する金額も増え、経済効果もアップさせることが期待できる。こうした取組みをクルーズ船客が増加して追い風が吹いている今こそ、行政や民間が一体となって進めていくべきだ」と語る。

■後輩へのメッセージ

程氏は、「当時は、就職環境も厳しかったほか、日本人学生も留学生も区別は無く、また留学生を対象とした就職支援窓口などはほとんど整っていなかったこともあり、内定取得後、留学ビザから就労ビザへの切り替えにかかる事務手続きなどを自分でしなくてはならなかった」と就職活動を振り返る。

一方、現在の学生は以前と比べると恵まれた環境にあり、「学生自らが将来の進路について適性を真剣に考え、5年後、10年後の働いている姿をイメージし、それに向かって一生懸命努力する姿勢を強く持って欲しい」という（写真3）。



（写真3）程 継中氏（一番右）長崎ウエスレヤン大学の学生たちと

さいごに

慢性的な人手不足を経営上の課題として挙げる企業が多いなか、留学生を採用対象としている企業はまだ少ない。勿論、受け入れ側の企業にとっては、在留資格取得の手続きなどの面で課題もあるが、これまでのレポートで見てきたように、留学生を短期的な人手不足への対応としてではなく、企業の戦力として採用すると、能力を発揮し、成果につながっている事例もみられる。こうした成功事例を、ひとつひとつ積み重ねていくことによって、留学生の卒業後の活躍の場が広がることを期待したい。

（泉 猛）